八柳卓史
ＨＡＮＤＳ世田谷事務局員

私が世田谷の障害者運動と出会ったのは、1980年代の初めごろだったと思う。当時の私は、足立の金井君の普通小学校転校運動に関わり、その中で、支援に来ていた世田谷の障害者たちと出会ったからだった。特に二日市安さんとは、支援に関わる障害者仲間として、障害者の普通学校入学を実現するには、障害者が街の中で暮らしぬいていくことこそが最も必要な支援だし、自らの闘いとの連帯になると意を同じにしたと思う。

その関わりの中で、世田谷の他の障害者たちとも知り合い、地域の中で他人介助を募って自立生活している多くの仲間の実態を教えてもらった。

私ごとであるが、そのころちょうど、荒川区の障害者福祉の仕事をしていたこともあって、様々な福祉制度が、障害者本人の希望ではなく家族や専門家といわれる人々の意見のみで組み立てられていたことを目のあたりにしていた。当時、国際障害者年で謳われていた「完全参加と平等」のスローガンと裏腹に、障害の軽重やその特性を最優先にした施策は、必然的に、障害者を社会から分離し、箱もの施設への収容中心の方向が顕著に表れていた。現在の障害者基本法が、心身障害者対策基本法と呼ばれていた時代だった。普通学校にかよう運動は、教育の分野での一課題でなく、全生涯を地域の中で暮らしていきたいという、障害者自身の当たり前の声の一部として捉えだしていた。1986年に設立したＤＰＩ日本会議の事務局に参加したのもこんな動機からだった。

1990年にハンズが設立してしばらくしてから、当時、ハンズの運営委員長だった二日市さんから、手伝ってといわれ、友人でもあった斎藤明子さんからも勧められた。そんな中でハンズの理事を引き受け、横山さん、山口さんを始めとするハンズ世田谷の仲間との現在へ続く始まりであったと思う。

日本中で 120以上ある自立生活センターの中でも、複数の幼いときからの障害者たちがその中心となって運営している所は数少ない。ハンズはその貴重な一つの事業所として、これからも、失敗を恐れず、試行錯誤を重ねて行くことが可能なタフさを伝統として将来につなげていきたいと思う。

現在、福祉制度再編の嵐の中で、私たちの生活は翻弄され続けています。しかし、ハンズがこのタフさを持って生き抜いていけば、どんな嵐も大波も越えていけると信じています。

菅原和之
HANDS世田谷・ケアズ世田谷
男性コーディネーター

「HANDSとわたし・・・すがわら☆かずゆき」

私がHANDSの介助会員に登録させて頂いたのが、2000年10月なので、ちょうど今年でまる10年ということで、HANDSの歴史の半分だけお付き合いしたことになりますね。HANDSに登録するまでは、数えてみたら、バイトも入れたら、10個以上の職を転々としていたのですね。それでHANDSが10年も続くとは！って感じなんですけど。でも、運動と仕事が合致しているっていうのは、私にとっては、とってもフィット感があるんです。音楽業界に入ったときも、趣味と実益と思ったんですが、やっぱり無理があった。自分を曲げざるを得ない場面がありすぎて。HANDSに居たって、100％自分の思い通りではないけど、でも、比較すれば一番、率直に動けてる感はありますね。いや、加齢とともにへなちょこになって、そう思っているだけかもしれないけれど、そう思えることが大事かな？自分にとっては。

私は、男で異性愛者で非障害者だから、そういう自分のポジションをとらえやすい、かつ、開き直りやすい。だからかな？今まで経験した職場の中では、とても、居心地がいい・・・って甘えですか？

ともかく、どんな形であっても、HANDSと共にありたい、と今は思ってます。そして、HANDSの中に、自分の抱えてる課題、例えば婚外子差別の問題とか、優生思想の問題とか、も持ち込みたい、そんな風に、妄想にふけつつ、自分もふけていく・・・のかな？次の10年も・20年もよろしくしていただけたら、とてもうれしい。

伊藤志乃
HANDS世田谷・ケアズ世田谷
女性コーディネーター

「HANDSと私」

HANDSに出会って半年、法律・障害者運動等分からないことだらけの中、私は「時間ゆる～、このペースでみんな生きられたら病気減るんじゃん？」とか「介助って自分の自我を捨てて一体になれると超気持ち良い♪」などとお気楽に思ったり、活動家の方々から刺激を受けてひそかに興奮したりしています。

今後は頭での理解を深めることと、20年の歩みの素晴らしさ、これから参加していく喜び

を胸に「ＨＡＮＤＳの活動がこの世に必要なくなる日」を祈りながらコーディネーター行（←修行の行）に勤しみたいと思います。

濵野祐佳
ＨＡＮＤＳ世田谷・ケアズ世田谷
女性コーディネーター

私は昨年、ふとしたことでＨＡＮＤＳ世田谷のことを知りました。そしてその時に初めて「自立生活運動」というものを知り興味を持ちました。しかし、中学を卒業してから障害者と接することはなく、興味や共感できるものはあるけども現実味はないというのが正直なところでした。そういった気持ちが打ち壊されたのは、最初に事務所に伺い面接を受けた時でした。

スタッフの一人と面接をしたのですが、その方と趣味の話に大いに花を咲かせてしまいました。ＨＡＮＤＳだけに限ったことではありませんが、そういった話をできる人は職場にはいないと思っていました。そして「特にここにはいるわけがない」と思っていたのも事実です。しかし、意外なことに、そんな「ここ」にいたのです。

とてもとても馬鹿げた話かもしれませんが、喜びと驚きでした。私は、自分がいかに思い込みをしていたかを思い知らされた瞬間でした。彼らのすべてが、何か特別な、自分とは接点のない生活をしていると思っていたのです。

世界の狭さは、ごく普通にここへも繋がっていたのです。

それから、ＨＡＮＤＳのスタッフになり、毎日障害者の人たちと一緒にいます。そして毎日言葉を交わします。いつの間にか、それに対する特別な感情はなく、日常になり、それがごく当たり前に「私の職場」となっています。こういったことが、街でもごく当たり前に起こっていけばいいと思います。

まだまだ分からないことばかりですが、小さいことが大きくなっていく瞬間を見ていこうと思います。

藤村和子
ＨＡＮＤＳ世田谷スタッフＯＢ

「ＨＡＮＤＳ20周年に寄せて」

ＨＡＮＤＳ20周年おめでとうございます。

私がＨＡＮＤＳ世田谷に関わらせていただいたのは、設立の準備段階から関わらせてもらい、とても貴重な経験をすることができました。

当初の派遣事業から全国自立生活センター協議会に加盟するか否かで討論をしていた頃を私は懐かしく想い出しています。

私はＨＡＮＤＳのお陰で、いろいろな危機を乗り越えることができました。地域で曲がりなりにも自立生活を送り、失敗しながらも改善をしようとし、涙あり困惑ありの日常から学び成長できたことに感謝です。そこで味わう生活の達成感を楽しめる私に成れました。

ＣＩＬの理念にも沿う活動が、これからは求められるでしょう。日本のＣＩＬはアメリカのＣＩＬの考え方を基本にしながらも、日本独自の繊細さや配慮が有ってこそ、これからのＣＩＬは発展し、みんなに共感してもらえるＨＡＮＤＳになれるでしょう。

先ずは最も重い障害者が安心して暮らせるシステムの構築を、一日も早く創って行きたいものです。

野島多佳子
ＨＡＮＤＳ世田谷・ケアズ世田谷
女性コーディネーター

私がＨＡＮＤＳと出会ったのは、今年の 3月。ハローワークの求人票を通じてのことでした。で、ホームページから過去の「ＨＡＮＤＳ通信」を呼んで、「なんか面白そう！」という直感から申し込みをし、４月から介助に入り……今に至っております。なので、この文集に寄稿している方のなかでは、一番の「ひよっ子」ということになるんでしょうか。

今まで、障害者運動や介助に携わったことのない私。

20歳の大人（ＨＡＮＤＳ）といきなりお付き合いを始めた小学生（幼稚園児かも？）みたいなものです。同行した集会でシュプレヒコールを上げる場面でモジモジしたり、新鮮な出会いに感動したり、とめくるめく多様な世界を、戸惑いつつも楽しんでいる段階です。

いずれは与えられるだけではなく、少しでもこのワンダーランドを形づくる一員になれれたらと思っています。そのためには、成長して、こちらも大人になる必要がありますね！

これからも、どうぞよろしくお願いします。